

チェリー通信7月号

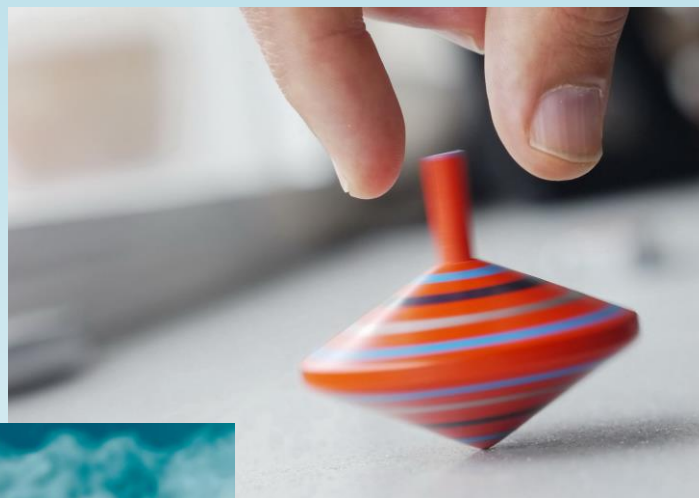
7月のイベント情報

- 9日 サッカー教室（アンドロメダ カシオペア5歳）
- 18日 音楽教室（アンドロメダ ペガサス）
- 19日 避難訓練
- 23日 体育教室（ペガサス オリオン カシオペア4, 5歳）

園長のおすすめ○○コーナー

2024年度からスタートしている園長のおすすめ○○コーナー

このコーナーでは園長の独断と偏見でおすすめしたいモノをご紹介します！



今回はドキュメント書籍をご紹介します。

※閲覧注意

- ・ 東日本大震災当時のことを思い出したくない方（次から2ページ）は飛ばしてください。
- ・ 感想に熱がこもりかなり長文になってしまいました。長文苦手な方は飛ばしてください💧

（マスに分かれてますのでそれぞれランダムに、あるいは一つだけ読んでも読み取れるようになってます。）

紹介書籍

出版社 講談社

著者 NHKメルトダウン取材班

書籍 福島第1原発事故の真実「ドキュメント編」

補足：NETFLIXオリジナルドラマ「THE DAYS」もこの著書を参考にドラマ化されていますので、本が苦手な方はこちらもチェックしてみてください！



改めておすすめ書籍について記載します！

東日本大震災の時、福島第1原発の爆発事故やその後の海水注入、処理水問題などは、当時被災した人、事故をテレビ報道などで目の当たりにした人にとっては忘れがたいことですし、昨日のことのように鮮明に思い起こすことができるのではないかと思います。

私もその一人ですが、当時は目の前で起きていることへの対応に必死で、原発事故についてはどこかテレビの中のことのような感覚をもっていたと記憶しておりますし、本書を読むまでは「危なかったけど事故対応が上手く行き、収束できたこと」と認識しておりました。

地震の揺れや被害に対して必死に対応している最中、当時は全く想像もつかないところで福島第1原発の事故は起きており、テレビ報道で知ることのできた状況とはまるでレベルの違う（政府発表や東京電力の報告は情報が錯そうして不正確だった、混乱を避けるための発表、表現を使用していた。）事態であったことがこの著書内容から伺い知ることができます。

震災当時、私（園長）は年長のカシオペア座組担任をしており、地震が起きたその瞬間は外遊びからクラスに戻り（就学に向けたカリキュラムでお昼寝をしない日だったので）手洗いなどしている最中でした。

日頃の避難訓練のたまものなのか、私の掛け声よりも早くテーブルの下に隠れる子どもの行動が非常に印象的で、自分自身も大きな揺れの中非常に冷静に状況を観察し、子どもの安全確保に努めていたことを記憶しています。（地震ではずれた押し入れの扉をテーブルにかけて落下物から身を守れるように簡易屋根にして対応したり・・・）

著書内容から伺い知ることのできる原発事故の様相は、誤解を恐れずに言うならば、パニック映画のそれと同等かそれ以上のことが起きていたということが分かります。それも人の力ではどうしようもない事態。あの手この手を尽くすけれどそのどれも全く効果を発揮しておらず、文字通り制御不能。近年のパニック映画ではアカデミー賞を受賞したゴジラー1.0が記憶に新しいですが、その中のゴジラでさえ、まだ人の力によって最終的にはある程度対処されております。しかし、福島第1原発事故はあらゆる手段が講じられても事態を収めること叶わず、絶望と諦めの段階まで進んでいたことが著書から分かります。

絶望と諦めの末、現実的かつ具体的に想像される最悪のシナリオは、核燃料のメルトダウンと完全な撤退だったことが著書内容からわかります。（事実、当時も状況の奇跡的好転が確認されるまでは終盤撤退作業が進められていました。）

最悪のシナリオの通り進展していたと仮定すると、メルトダウンした核燃料は原子炉外へ放出され、撤退後はもちろん人の手による対策対応はできないということ。制御不能な核燃料による被害と避難範囲は半径600キロにも及ぶものというシミュレーションです。それは南は神奈川、北は岩手をも含みます。

起こり得る事態を想像すると、東日本全域が機能を失っていたのだということがわかります。仮に首都機能を移して機能維持できたとしても東日本の生活と産業は全滅し、当然海外との輸出入は途絶え、たどる道は日本という国の崩壊、消滅です。

これが空想やファンタジーではなく、ほぼ起きる覚悟をしていたことと考えると背筋が凍ります。

結果、奇跡的に最悪のシナリオを回避できたということが現時点で把握できる事実ですが、いまだにその原因については事故後放射能の影響で調査出来ていません。この奇跡も映画の主人公が残り1秒でボタンを押して世界を救う奇跡とは違い、あくまで予測不能な核物質の“たまたま”辿った道による確立の低い偶然の産物だったという事実を知るととてつもない恐怖です。

放射能漏れ、最悪のシナリオによる被害範囲半径600キロということは宮城県も完全にその中に含まれます。ということは私たちの今の生活環境は完全に失われていたことを意味します。

恐ろしい想像をするならば、今出会っている子どもたちが生まれていなかったかもしれませんし、生まれていたとしても、私たち職員は当然子どもたちには会えてはいないでしょう。そもそも仙台市内で園運営はおろか、生活すらできません。

最後に・・・

本書は事故当時の鬼気迫る様子が描かれ、ドキュメントとは思えないようなドラマチックな展開に引き込まれてしまいます。興味本位で楽しむ内容では到底ありませんが、震災から10年が過ぎ、冷静に当時を振り返ることができたので、本書がとても興味深いものだと感じることはできたのではないかと思います。

恐ろしい事実に驚愕し、想像すると背筋の凍る思いですが、逆にとらえると、奇跡が起きたおかげで今の私たちの生活があり、子どもたちの命があるのだと改めて考えさせられます。

当たり前の日々や生活は実は綱渡りの奇跡の上に立っています。つきなみですが、命あることに、平凡な日常が送れていることに感謝し、大切にしなければならぬとあらためて思います。